

2018 年 9 月 9 日（日）「恵みによる献身」

マタイ 19:23-30

23 それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。24 まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」25 弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」26 イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」

27 そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」

28 そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」

29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。30 ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。

#### 【序論】

キリストの弟子となる。これは私たちにとって人生最大の目標であります。また、人をキリストの弟子に導くこと。これは教会最大の使命であります。

今日の箇所では「入信」と「献身」の密接な関係が語られています。前回は、富める青年に対して、主の弟子となるに当たって、「財産を捨てて我に従え」という高い要求が語られたところから学びました。しかし、これは「入信の条件」として言われたのではなく、彼の中にある「財産への執着心」（隣人を十分に愛してはいない自分）に気づかせることが目的であった。ところが彼は、主の言わんとしていることを理解できず、顔を曇らせて去って行きました。

今日の箇所では、このやりとりを見ていたペテロが「**私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました**」と胸を張る姿を見ます。一見ここには「主に従うことに失敗した者と成功した者」という図式があるようにも見えるでしょう。ある意味ではそうなのかも知れません。しかしながら、ペテロの中にも根本的な誤解があるようです。この誤解は「恵み」というものの性質をよく分かっていないところから来るものと思われます。

## 【本論】

### 本論 1. 富む者が神の国に入ることの難しさ

それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」弟子たちは、これを聞くと、たいへん驚いて言った。「それでは、だれが救われることができるのでしょうか。」(19:23-25)

「天の御国に入る」という表現が出てきますが、この言葉が 19 章の中だけでも様々な言い換えられています。「永遠のいのちを得る」(16 節／ヨハネ的)、「神の国に入る」(24 節)、「救われる」(25 節)。これらはすべて同じ意味であり、「救い」という事柄の含蓄の深さを物語っているでしょう。

主イエスは「金持ちが天の御国に入るのはむずかしい」と言われます。この言葉を聞いて、弟子たちは大層驚くのですが(25 節)、それは、当時、財産は主の祝福の結果与えられるものだという考え方が根強かったからです。事実、アブラハムも、ダビデも、ソロモンも、主の祝福によって多くの財産を得ました。そして、主イエスの共同体の中にはエリート取税人出身のマタイもいましたように、決して貧しい者ばかりで構成されていた訳ではありません。それだけに、ここでの主の言葉は捉えにくい面がある。

主は一度ならず二度までも言われます。「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい」。「らくだ」とは、当時パレスチナで考え得た最大の動物。「針の穴」とは、考え得る最小の穴であります。つまり、これは金持ちが救われることの「難しさ」に留まらず、「不可能であること」を表す誇張表現なのです。

さて、ここで主が言っておられる「富む」という事柄について、私たちはよくよく考えなければなりません。これはもちろん、文脈通り金銭的に富んでいる人のことを言っていると捉えて、まずは間違いないでしょう。しかし、人は財産だけではなく、実に様々なものによって自分を富ませることができてしまう。地位、名誉、家柄、学歴、業績、能力、資格、持ち物、健康、美貌、趣味…。そして、実は「貧しい人」であっても、心の中で何らかの「富」を築き上げることが可能なのです。こう考えていきますと、主の御言葉は「富める青年」だけに向けられているものではなく、すべての読者に適用されるものとなってこないでしょうか。私を含め、人間というのはこの世のものに大変執着しやすい。そして、それを捨てることは身を切られるほど痛いものです。

## 本論 2. 恵みによって捨てる

イエスは彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」(19:26)

この主の言葉は、25 節で弟子たちが「それでは、だれが救われることができるのでしょうか」と言った事柄への答えとなっています。弟子たちの中で激震が走った。神に祝福されている金持ちが救われないのであれば、誰が救われ得るのか。私たちの言葉に置き換えてみれば、何らかの地上の「富」を持つ者が救われないのであれば、一体どうして自分が救われ得るであろうか！ということになるでしょう。救いの不可能性を知るということは、恵みを受ける上でどうしても必要なことなのです。

主イエスは、救われることが不可能な私たちに対し、「しかし、神にはどんなことでもできます」と言われる。ここに福音の核心があると言ってよいでしょう。人間にはおよそ自分の力で「富」を捨てることはできません。いえ、仮に「これは命令だから」と言って何かを捨てたとします。しかし、そこには何かしらの後悔の念が残るのではないのでしょうか。これでは本当に「ささげた」ことにはなりません。どこか嫌々「押さえつけられているような」感覚で「言うことを聞いている」だけです。つまり、自分の力で捨てることは、真の献身ではないのです。神が捨てさせてくださるのでなければならぬ。もし神がその人の人生において「もう不要だ」と感じられる瞬間を与えてくださるのであれば、それは恵みによって捨てることになります。今まで握りしめていたものよりも、はるかに優れた宝を発見した時に、かつてのものは自分の中で価値がなくなるのです。永遠のいのちの尊さを知る時に、そのことが分かるようになる。いきなり何でもかんでも捨てればよいということではありません。手放さざるを得なくなった時に、潔く捨てていけばよいのです。主が示される「時」がきっとあるでしょう。

そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」(19:27)

「恵みによって捨てる」ということを知るならば、このペテロの言葉が的を外れたものであることが分かるでしょう。確かにペテロは網を捨てて主の召命に応えました。しかし、それは彼の力によったものではありません。主のまなざしに捉えられたからです。主が弟子を召される時には共通して「ご覧になった」という表現が出てきます(4:18, 21, 9:9)。これは、主の愛のまなざし。他の何物にも代えることのできない救いへの召しです。そして、今日の 26 節にも「じっと見て」という表現がありますように、主は弟子たちを慈しみ、ご自分こそが不可能を可能にできる神であることをここに宣言しておられるのです。

ペテロは自分の力で網を捨てたと思っていました。しかし、実のところ、主イエスの側にイニシアティブがあり、着いて行かずにはおられない何かに捉えられたに過ぎなかったのです。「**私たちは何がいただけるでしょうか**」という言い方には、「あの青年にはできなかったことを、俺たちは成し遂げた」という誇りが現れています。これは「恵み」の性質を彼がまだ理解していなかったことを言い表しているでしょう。しかし、主イエスはそんな彼を叱りつけるのではなく、やんわりと弟子たちが御国で受ける「報い」について語っていかれます。

### 本論 3. 主に従い行く者への報い

28 節以下では二種類の「報い」について述べられています。

**そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」(19:28)**

第一の報いは、主イエスに従って行く者が、永遠の神の国が完成する時、主イエスと共に王としてその国を治めるようになるという約束です。「**イスラエルの十二部族**」とは、旧新約を貫くすべての神の民のことでしょう。「さばく」とは、「治める」「統治する」を意味する言葉ですが、神の国における統治とは、究極的には「仕える」ことです。今まさに主イエスが弟子たちにお仕えくださっているように、人と人とは完全に仕え合う世界が広がる。そして、一番仕える者が神の国では最も高められるのです。

**また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。(19:29)**

第二の報いは、この地上においてさえ、主イエスのために捨てたものは、幾倍にもなって返ってくるということです。これは、もちろん、どれもが「量的」な意味で捉えられる言葉ではありません。恐らく、家族をささげた人は、(母が何人も増えるはずはありませんから) 霊的な家族が与えられることによって報いを受けるのでしょう。畑に象徴される財産を手放した人には、神ご自身による養いが豊かに体験されるということだと思われます。いずれにせよ、神はご自分のために大切なものを手放した人を放っておくことはせず、溢れるほどの祝福で満たしてくださるでしょう。

**ただ、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。(19:30)**

この最後の節は、富める青年が去って行くのを見て、俺たちはあいつのようではないと胸を張ったペテロたちを、あくまでも恵みに立たせようとする主の厳しい思いから出ていると思われます。この言葉に基づいて考えるならば、ひとたび去って行った青年も、

神の恵みによって救われる可能性があるのです。今は捨てることのできなかつた富が、後で主のために豊かにささげられていくかも知れない。主の恵みは広く深い。そして、今誇っている弟子たちは、やがて「あとの者」となるかも知れません。事実、十字架の場面ではペテロは三度主を否み、もはや弟子と呼ばれる資格のないところまで堕ちます。しかし、彼はもう一度恵みによって立ち上がり、主の宣教の御業を最前線で担っていく器になります。このように、すべては主の恵みが先立っていく。誰一人として自分の力で永遠のいのちを得ることはできないし、自分の力で「富」を捨てることもできないのです。

### 【結論】

私たちもまず、この世の「富」に執着している自分をよく見つめなくてはならないでしょう。これは「偶像」と言い換えることもできます。そして、そのような自分を憐れんでくださるよう、主に祈り求めたいと思うのです。そして、時にかなって、福音の素晴らしさゆえに、地上の富を一つ一つ手放していきたい。天には何も持っていくことができません。身軽な存在となって、足取り軽く主に仕える者とされたく願います。

### 【祈り】

私たちの主なる神よ。人間は実に多くの宝をこの人生で所有します。それは、目に見えるものもあれば、目に見えないものもあります。そして、自分だけがそれが何であるかを知っています。もしこれらのものがあなたとの関係を妨げているのであれば、それを取り除けてください。私たちの力ではできません。ただあなたの恵みが先行し、私たちはへりくだって従い続けるものでありたく願います。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の宝の本質、朽ちることなき命の価値を教え給う、父なる神の愛。

各々の心に潜む「富」に気づかせ、時に適って献げ得るものとさせ給う、主イエス・キリストの恵み。

献げられた宝の幾千倍、幾万倍もの報いをもって、永遠に至る人生を祝し給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。